

住宅の平面構成におけるD・Kの型の研究

—住まい手の生活様式との対応関係 その1—

川崎 衿子

〔1〕研究の意義及び目的

現在、我国の住宅の平面構成や、住様式は多様化状況にあるといわれている。が、その一方絶対的な居住床面積が不十分であることなどから、住要求を十分に満たすことができずに、類型化の傾向も著しく、その様態は必ずしも明らかにはされていない。住宅の変化、発展は基本的には人間関係の意識の変化、発展に対応しており、従って人間関係の矛盾の克服過程が住宅平面構成の発達史であることは、多くの論証をもって理解することができる。そして、それらの矛盾克服としての住宅の変革は、多くの場合、長い時間的経過の後に行われるのが普通で、社会情勢の変化速度と比べれば、かなり緩慢であることが認められる。

我国の場合、第二次大戦後あるいは、その後続く高度経済成長過程において、社会的変化が急激で、価値観の変容幅が、非常に大きかったために、人間関係意識も広範囲に段階意識が共存してきているのが特徴的である。従って住宅も種々の段階の平面構成が重層的な様相で共存してきたものと考えられる。しかし近年の住宅では、人間関係、家族形態、住意識の変化に伴って、しだいに、いわゆる「公私室型住宅」が定着しているといえよう。さらに最近の家族生活や、家庭のあり方を見直す立場からは、家族みんなの場であるところの「公室」部分の充実が、優先であるとも論じられてきている。これらのことは、平面構成における「公室」のあり方について、新しい提案や実践が切に望まれているからに他ならない。

そこで本研究では、住宅平面構成における公室部分、特に家族生活、家庭運営にとって重要な条件となる「食生活まわり」に焦点をあて、D-

Dining Space, と K-Kitchen Space, の関係がつくる型を分類し、考察を試みることにした。

公室部分の中でも、特にDとKの関係をとり上げたのは次の理由によるものである。

1. Kで使われる施設、設備、器具の進歩変化は著しく、従って住宅内部でのそれらの交換、あるいは、スペース全体の変更の機会も多く、常に変革の動機を抱えている。
2. 一般的に住宅平面構成の型が変革されるには、長い時間経過が必要とされるのに対し、D・Kについては、生活の時代的影響を比較的短期に受けやすく、しかもその特徴を捉えやすい。
3. 毎日の作業にかかわるだけに、D・Kまわりへの関心が強く、住まい手はそれらに関する情報も多く持っており、選択の機会が多い。しかしながら、D・Kの型と自らの生活との関係については、適確な把握がなされているとは言い難く、多く問題が存在すると思われる。
4. D・Kを中心とする「食生活」をつかさどるスペースは、家族の家庭参加の最もしやすい場所であり、他領域の生活の場面よりも、家庭の機能がわかりやすく集積されている。

〔2〕研究の方法

次の主な作業によってDとKの関係がつくる型を分類した。

1. 1980年以後の住宅設計専門雑誌から、戸建注文住宅を任意に、約200例を収集した。
2. 多種多様な設計例から、型分類のため、Dと

表1.

| | | EYE LEVEL | E ₁ | E ₂ | E ₃ | E ₄ |
|-----------------------|--------------------------------|-----------|---|--|---|---|
| LAYOUT | 視線の広がり方 | | | | | |
| | 食卓に対する体の向き 流しに向かう位置を体の向きとする | | | | | |
| | | | <ul style="list-style-type: none"> ・D・Kとの間に視線を遮るものがない ・D・Kとは同室空間で一体感が強い | <ul style="list-style-type: none"> ・調理の手元を隠しながらもKからDを見ることができる ・E₁よりもD側に落ち着きを感じられる | <ul style="list-style-type: none"> ・DとKは空間的につながっているが視線を遮るものが存在する ・DとKの互いの生活上の影響は少ない | <ul style="list-style-type: none"> ・DとKは独立した空間 |
| L ₁ | OPEN | | | | <ul style="list-style-type: none"> ・視線が遮られていることから体の向きとの関係はやすい | |
| 食卓の方向を向きながら調理をする | | | | | | |
| L ₂ | | | | | | |
| 食卓の方向が調理作業に対して横向きである | | | | | | |
| L ₃ | CLOSED | | | | | |
| 食卓の方向が調理作業に対して後ろ向きである | | | | | | |

Kの立面形態でのかかわり方と、平面形態でのかかわり方に一定の視点を加えた。即ち、立面形態の分類のためには、視線の広がり方を問題にし、一方、平面形態の分類のためには、調理作業をする人の体の向きとDの配置関係に着目した。それら2軸の視点から、空間の質を限定した。表-1にみられる通りである。

3. 表-1より作製された8タイプについて、その空間特性、作業性の問題、人間関係の展開の様相、などについての考察を行った。

[3] D・Kの型に関する考察

以下、研究の方法で示した表-1の内容に従い、順次考察を行う。

1. E₁L₁

食卓の方向を向きながら調理をすることで、KとDとの一体感が強い。さらに、KとDの間には視線を妨げるものが存在しないので、空間の同質性も高い。調理や後片づけをしながらも、食卓に居る家族との会話を続けることが可能である。空間的にも時間的にも生活を断絶することなしに、家族共有の場を家族全員でかかわることができる。皆で、楽しく話しながら、作りながら、食べながら、飲みながらといった調理と食事が同時に進行してゆく光景が感じられる。又、調理途中の煮物の様子を見たり、調理の手順をそばに居て覚えたり、手伝ったりする機会も増える。さらに調理台そのものが、食卓となっている様な場合には、つくることと食べることの一体感はより強まる。又、食卓に鉄板や炉を設けたりすると、食事に遊びの要素が加わり、食卓をかこむ楽しさを生活の中心にしようとする意欲が感じられる。

しかし、このように、コミュニケーション重視の、積極的に見せる台所では、食事の場とのインテリアの統一性や、食卓まわりを含めた家具デザイン性、機能性などの問題も多い。特に、熱、臭気、煙、湯気などの排出処理については、十分な配慮が必要であり、また台所をいつも美しく保つための維持管理に関する労働的負担は大きい。

日常生活で、毎日使用する台所としては、かなり神経を使うこのタイプも、非日常的な生活を過す別荘などでは、その特色をうまく利用することができる。それは、そこでの生活が単純であり、物も少なく、調理回数も少なく、台所まわりも片づけやすいことなどに加えて、食事の楽しみ方が、誰もが一緒に同時に食べながら、しかも労働を共有することで、より充実感を味わうことへの意識傾向が強いからと考えられる。(図-1)

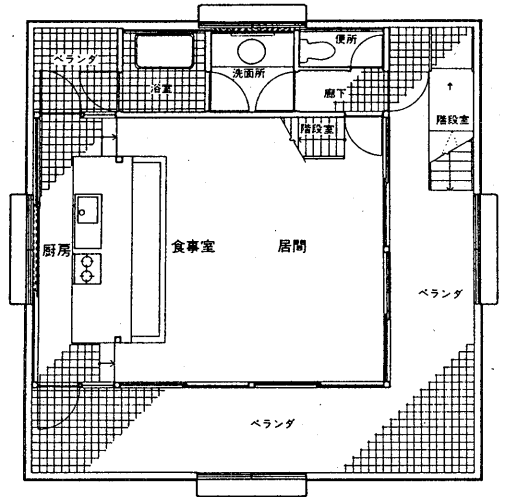


図1 E₁L₁の事例

2. E₁L₂

食卓の方向が調理作業に対して横向きでありながら、KとDの間には視線を遮るものがない。調理をする人の正面は壁、窓、或いは通路である。調理中に、食卓にいる人と会話をするには、横を向いて行くことになるが、空間的にはつながっているため、KとDとの場の心理的な一体感が感じられる。しかし、E₁L₁にみられた様な対面関係ではないので、調理をする人は、調理中に視線が食卓の方向に広がらず、作業への集中度は、より高くなると考えられる。また、常に食卓に対して正面を向き、お互いの視線が直接ぶつかるのとは違い、視線をそらしたり、かわしたりの余裕が生まれるため、緊張関係は弱まる。従って、空間

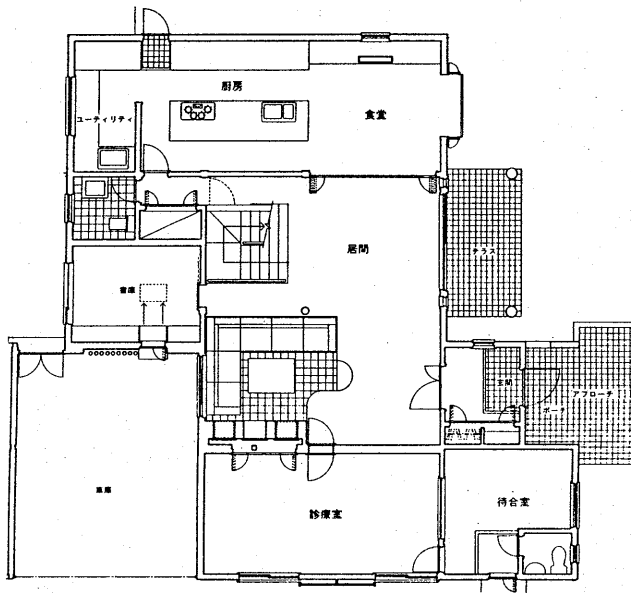


図2 E₁ L₂ の事例

的にはつながり、心理的にも一体感はあるものの、場の独立感は、E₁ L₁ よりも強まると考えられよう。

平面計画上、このタイプは、調理作業台の配列が一行型の場合には、D からみると奥行きのあるレイアウトになり、又、L 型、U 型配列の場合では、K が囲まれた空間状態になるため、いずれも K が大きくなるに従って、独立型の台所にみられる様な閉鎖的な要素を合わせもつ傾向がある。

L-Living Space との関係を含めると、このタイプでは、L、D、K が同一軸上に並ぶことは稀少で、多くの場合 D・K 軸から直角に曲がった軸上に L が配置される傾向がみられる。この場合、全体は L、D、K で構成される一つの空間でありながら、各スペースは、それぞれのエリアの独自性を持ちうることから、生活の使いわけ、即ち機能分化のしやすい平面構成であるといえる。(図-2)

3. E₁ L₃

食卓に背を向けて調理作業を行うタイプで、空間的には一室である。調理をする人は、食卓にいる家族と会話をする時などは、当然ふり向き動作

が多くなる。そして食卓からは、調理する人の後姿ばかりが目につくようになる。しかしながら、K、及び D の生活行為から要求される床面積の重ね合わせが可能なることから、小規模住宅では、最も多く見られる。加えて、調理をする側からはサービスの手軽さ、動線の短さなどへの評価も高く、家族参加の機会を多くするなど、現状において、普及度が著しく高いものと言えよう。

戦後、住宅公団が設立され、新しい時代に向かった住宅が大量に供給された時、ここに示したいわゆるダイニングキッチン採用は画期的なことであった。食べる場を椅子式にすることにより、住空間内の食寝分離を計り、家事労働の軽減などを目標に能率的、合理的な試みが積極的に行われた。それ以後、ダイニングキッチンは広範囲に普遍的な型として定着がみられることになった。しかし今日、この公団住宅の流れをひくダイニングキッチンが、同価値を持ち得ているかについては、必ずしもこれを肯定することはできないと思われる。

食事をする立場からは、調理作業周辺の乱雑な光景や、音や臭い、厨芥物などの存在は決して心

地良いものとは言えない。それらに対する嫌悪感、そしてもっと落ち着いた雰囲気のある場所で食事をとりたいたいという願望は、何らかの方法でKとDを分離しようとする動機を作り出してゆく。このことが、様々なD・K型の発展を促し、新しい住様式、住空間を導いていったと仮定すれば、このE₁L₃は、これら一連の原型であると考えることができる。

E₁系列は、KとDとのオープン度が非常に高く、従って本来静かで落ち着いて食べたいという食事側の要求と、思う存分料理の腕をふるうために、汚したり、散らかしたり、臭いや熱を放ったりする備えが欲しいという要求とが、互いにうまく処理されていれば問題は少なくなる。そのためには、十分な収納設備や排煙排気などの設備、機能にふさわしい仕上材料の選定などが重要で、さらにインテリアデザインとしても両方の要求を満足させる質の高さが求められよう。(図-3)

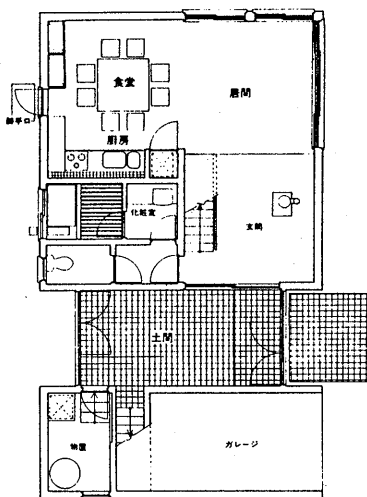


図3 E₁L₃の事例

4. E₂L₁

食卓の方向を向いて調理をし、KとDとが空間的、視覚的につながっている点ではE₁L₁と同じタイプである。しかし、このタイプでは、調理作業台前面に手元を隠すための腰壁、カウン

ターなどを設けている。流しを使う作業には、洗い桶、洗剤、スポンジ、水切りかごなどの類の美しくない道具が必要である。また、生ごみ、泥つきの野菜、未処理の材料などが、流しまわりに溢れるといった状況は、ごく一般的な光景である。さらに、コンロまわりには、煮たり、焼いたり、炒めたりと、一層複雑な道具類、器機類、材料などが並べられる。これら調理作業台の上に出てくる物は、時として著しく食事の雰囲気をこわす。一方、それらの乱雑な様子を解決するためには、常に汚れ物、ごみ、掃除について気を配り、調理中といえども何一つ無駄な物、無粋な物がはみ出さない様にするのが求められる。きれいにしておくために調理以外の余分な労力が必要となり、労働負担は大きくなる。そこで、これらの不都合さに対して現実処理をしたものが、ここにみられる腰壁、カウンターの設定である。調理に伴う水はね、油はねによる汚れも防ぐことが可能で、食事をつくる側からも、食べる側からも効果の大きい方法といえよう。

食事の位置からは、作業が見えず、しかし一室空間であるために、気持の交流も図れ、お互いが孤立することがない。対面型であるために、常に無意識の中にもお互いの様子を感じることができる。家族全員が調理、後かたづけに参加しやすいなどの点から、台所を家族生活の中心に位置づけて考える家族にとっては、歓迎されるタイプといえよう。(図-4)

5. E₂L₂

食事の場を横にみながら、調理をする点では、E₁L₂と同じタイプである。E₁L₂が食事中の座った位置から、台所内の手元がすべて見通せるのに対して、ここでは、両者を区分するカウンターや、収納棚が設けられ、台所での作業を隠す配慮がなされている。この高さは、1,200 mm までに大体がおさえられており、配膳や後かたづけなどの補助調理台としての役目も大きい。そして、この高さは、KからDへの視線は遮らず、従って

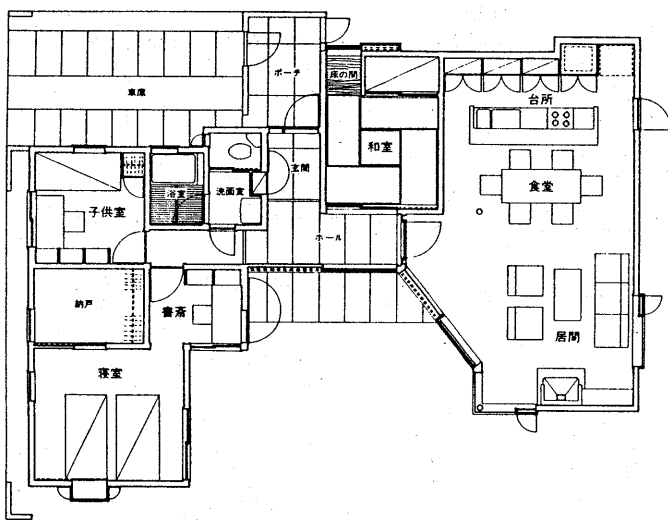


図4 E₂ L₁ の事例

一体感を保ちつつ、しかも、食卓側からは台所のむさ苦しい光景を少しでも見たくないという要求に、適切に応じているものといえる。食卓に対して横向きであるという関係は両者に緊張を与えず、お互いが無関心でいられるという自由性をもつことができ、心理的な独立性は高まる。さらに、天井から吊戸棚などが設けられれば、両者の場の独立性は、より高いものとなってくる。この場合、吊戸棚とカウンターなどの間に、開閉装置などをとりつけ、都合に合わせて空間を間仕切れることも

可能である。

平面計画的には、E₁ L₂ 同様、作業台を一行に長く配列した場合、DとKが一軸上に長くのびることとなり、従ってLは、その軸から直角に曲がった軸上に配置される例が多い。(図-5)

6. E₂ L₃

KとDとの間には、高さが1,200 mm以下で両者を区分する物が存在する。多くは、収納をかねたカウンターで、飾り棚としても、利用されている例がみられる。E₂ 系列の中でも食卓と調理をする人との距離が一番長く、さらに調理が後向きであることから、KとDの領域関係がはっきりしているのが特長である。調理する人の視線の通りは、後を向きさえすれば、十分であり食卓とのコミュニケーションに支障はないが、食卓側の足元は視角に入らず、様子が判りにくい。食卓側からは、座った姿勢で、台所への視線が遮られ、食事中は台所内を見たくないという要求に応じているといえる。

平面計画的には、壁面に沿って作業台を配置することから、その長さがとりやすく、排気設備も直接外気に面することができるなど、好条件をもつことが多い。

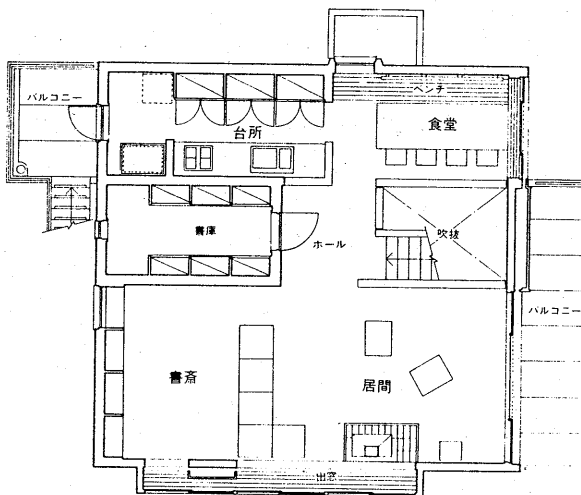


図5 E₂ L₂ の事例

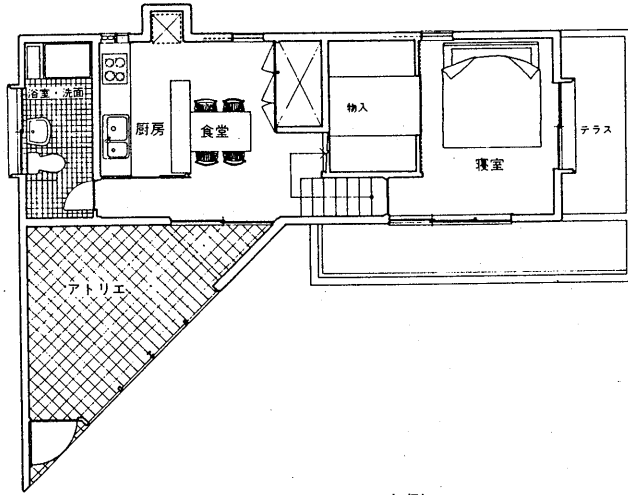


図6 E₂ L₃ の事例

住宅雑誌や、ショールーム、CMなどでみられる様に台所内の道具、器具類すべてを収納し、常に磨きあげて美しく保つことは、一般家庭の毎日頻繁に使用する台所では、大変なエネルギーを必要とする。場合によっては料理の献立にまで影響を与えることになる。そのためこのE₂系列に共通する1,200 mm以下での腰壁などは、現実の台所の状態を肯定した上で、その乱雑さを隠すという点で、有効な手段となっている。(図-6)

7. E₃

KとDの場は空間的には同一でありながらも、その間に高さ1,600~1,800 mm程度の壁や、食器棚などが存在し、そのためにお互いに視線は遮られる。従ってKでの作業者の体の向きと、Dとの関係は希薄であり、E₃系列については、これを一元化することができる。面積的にも機能的にも平面構成上はKが独立している場合と、類似性が強いが、その生活内容、さらに空間性能には大きな隔りがみられる。本質的にはKとDは同一空間であり、各々の生活の場の雰囲気、音や臭いを共有している。しかしながら、KとDの場の違いをことさら意識し、各々の生活を分断したい要求が表われている。食事と調理の場のけじめをつけたい気持ちを持ちつつ、何らかの方法でつ

ながっていたいという要望が、この様な型を指向してゆく。完全な独立型Kに比べ、食事の場との連絡はスムーズに行え、また調理する側の孤立感は少ないと考えられる。食事をする側からは、E₂系列までのオープン型Kと比べ、食事の場の落ち着きは格段に強まる。さらに建築空間の構造的な観点からみると、KとDとの間に存在する物を可動的にすることが多いことから、空間の可変性を考慮しているとも考えられる。即ち、収納棚や飾り棚、本棚などの家具が仕切りの手段として設けられ、建築本体との構造的なからみが少ないために、空間の自由性を求めることができる。または、大空間の中でのKの領域形成に有効な方法であるともいえる。

この家具などを利用する仕切りは、収納装置として効果が大いばかりではなく、電話やインターホンを組み込む、いわゆるホームオートメーションを司どるための家庭の情報管理のセンターとして最適であるともいえる。家族全員が集まりやすく、又誰かが居る可能性が大い場所であることから、位置的にも設備計画的にもそこへの設置は効率的な生活運営が期待できると考えられる。

8. E₄

KとDとが完全に分離され、Kが独立している。

この独立型 K は、調理に没頭することができると共に、煮たり焼いたり、炒めたりなどによる臭いや煙、騒音、汚れなどをそのスペースに閉じこめることができる。女性の社会進出に伴い、或いは家事労働意欲の減退からみても、日常的に調理にかける時間の短縮化傾向がみられる。インスタント食品、レトルト食品、半加工食品の利用は一般化しており、このことは、極端には調理設備が再加熱と盛りつけのみ簡便なものになる可能性をもはらんでいよう。しかしこの様な傾向への反動として、生活の主体性の主張、特に食生活の充実を意識的に考慮する動きも顕著になってきている。時間的制約のある勤務日以外の日には、本格的に料理を作ることを試みたり、食生活を商業主義から守ることを目標に、何でも手作りに励んだり、食事を自分達の手にとり戻すことへの執着を強くしている。この様な場合には、かなりハードな作業をこなすことになり、独立型 K はその備えとして適わしいものといえよう。

従来の独立型 K といえは、住宅の北側に設けられ食事の場とは全く断絶され、そこで働く人は身分的にも低くみられがちで、孤独な劣悪な環境にあまんじていなければならなかった。今日みられる独立型 K は、食事の場との連絡を密にすることへの工夫や、サービス動線への配慮などがなされ、家族の誰にとっても居心地の良い場所である様な設計手法がとられている。配膳用の小窓や、開閉自在の間仕切壁、視線はとおすが、その他は遮断することのできるガラス壁などを多用しながら、時と場合に応じて K と D とを引き寄せることを試みている。K を独立させながらも、K が家族全員にとって使いやすく、その関係を向上させるために、位置も環境も格段と好条件が与えられているのが、今日の独立型 K と考えられる。

〔4〕要旨

D・K の関係を開放的な型＝オープンキッチンにするか、或いは各々を独立させた型＝クローズ

ドキッチンにするかは、家庭の生活様式、食生活行動、家族構成などと深くかかわりを持つものである。

・オープンキッチンでは、家族の交流などについて積極的な姿勢がうかがわれる。又、この空間では、D・K との関係のみならず、くつろぎやだんらんの空間への展開のしかたにも、生活全体を流れの中で、無理なく行うことが考えられている。空間的にも、時間的にも断絶することなしに家族共有の場を家族全員でかかわりたいという願望が感じられる。特に調理をする立場からの要求は強く、K に閉じこもり、一人孤立して黙々とする作業から脱出したい気持が、オープンキッチンを指向する。調理しながらも家族と話しもしたいし、様子もみたい、同じ雰囲気の中に身を置きたいという要求が D と K、さらにはこれに続く居間を開放的に連結する型へと誘導してゆく。しかしながら、オープンキッチンは、キッチン自身のもつ必然的な性格から、音、熱、臭い、煙、蒸気など、他の部分にとっては、害悪となる要素を拡散させる。加えて調理作業に伴う光景は、これをあまり見せたくない、或いは見たくないという意識を持たせる。そこで、オープンでありながらも、それらの問題解決のために、種々の D・K まわりの設計が試みられる。E₂L₁、E₂L₂、E₂L₃ は、それらの具体的先進的な設計例である。これらの中には解決法が未熟、不適なために、なお問題を残したり、複雑化させたり、居住性能を低下させたりする例もみられない訳ではない。又、オープンキッチンは、調理する立場からのみ選択される訳ではなく、家族全体の生活指向によるものであり、一方では同じ調理をする立場からでも、キッチンをクローズドにしたいという強い要求があるのも確かである。

・クローズドキッチンでは、音、熱、臭い、煙、蒸気などをどんなに発生させても他の部分に影響を及ぼすことがない。多量な調理や長い時間が必要な時、思う存分作業に没頭することができ、し

かも他とは遮断されているために、乱雑であろうと構わない。インテリア性に気を遣う必要もなく、実用的、機能的であれば条件を満たすこともできる。一方、食事をする立場から、その空間への要求は、静かな雰囲気、インテリアデザインとしても美しく落ち着いた場であってほしいと願う。騒々しい調理の音や、機械の運転音、臭いや煙は避けたいし、その様子は見たくないと思う。従って、この様な要求は、DとKを空間的にも、視覚的にも分離させる方向へと誘導してゆく。

・家族の食生活のあり方は、D・Kの型の選択に大きな影響を与えるが、同時にD・Kの型が食生活を支配する条件を持ち得ることも事実である。例えば、オープンキッチンでは、油はねの後の掃除の手間がわずらわしいために、揚げ物料理の回数が減ったり、給水、給湯音や食器洗いの騒音が邪魔であるために、夕食後の後かたづけの時間が大幅に変更されたりするなどの状況も伝えられている。キッチンをオープン化したことで今迄みられなかった家族の協力、交流については、より充実した効果が表われてきているともいえよう。特に接客のしかたなどについては、クーロズドキッチンとは非常に異なる展開がみられる。即ち、家族と客とを遮る物の存在が希薄であることから、両者が空間を共有し得ることができる。従ってお互いに両者が限定された役割認識に縛られることなしに、家族と客とが共に楽しむことの時間を多くとることができる。この様な接客機会は特に妻側に多くみられ、生活の変容にD・K型が大きく働いていることを示すものと思われる。

・現在みられる食生活の多様化は、単に食品自体の多様化にとどまらず、食生活の場面、あるいは飲食の機会や場所の指向性においてもみられる。D・Kの型の選択要因は、一義的には食生活にあるとしながらも、その様な指向性から、全生活を含む生活行動、生活意識、価値観と関係が深く、換言すれば生活様式を見いだすことによって、

D・Kの型の予測を行うことが可能である。

今回の報告では、D・Kの型の分類とそこでの生活特性の考察を試みたが、引き続き住まい手の生活様式とD・Kの型の対応関係を検索中である。これらの一連の研究から、住まい手の生活様式のパターンを捉え、それらをもってD・K・Lを含む公室の平面構成の計画＝設計条件の予測を得たいと考えている。

おわりに

今回対象とした戸建住宅の中では、D・Kの位置は居住性の良い明るい位置を与えられる傾向が強い。又、D・Kまわりを家庭生活の中心空間として意識的にとり上げている例も多くみられる。家族のコミュニケーションを豊かにすることを目的とした、なごやかな家庭環境が感じられることも多い。このことは、一般的な住環境と照らしてみれば、恵まれた階層の一部の状況であるかもしれない。

1987年は国連の定めた国際居住年ではあるものの、我国の居住環境、居住水準はここにあげた例ですら、先進国の住宅と比較すれば見劣りがする。しかしながら我国の住生活の困難な状況を何とかのり超えようとする努力は、多様な平面構成、密度の高い設計となって住宅の質の向上への指針となっているのも事実である。住宅設計者は、それらについての重大な責任を担っているものであり、低質住宅の引き上げに対して、与えている影響は少なくないと感じている。より確実に住宅評価の基準を高めることを、今後共研究課題の一つに設定してゆきたいと考えている。

参考文献

- 1) 川崎衿子, 大井絢子監修, 共著「台所の設計」1986 建築資料研究社